

平和への 思いウムイ

令和7年度
「平和への思い(ウムイ)」
発信・交流・継承事業
報告書

1 目的

およそ 80 年前、沖縄県民は壮絶な沖縄戦を体験し多くの尊い命が失われた。当時の悲惨な実状を知る体験者の方々は高齢化し、彼らの記憶の継承が困難になりつつある現在において、同じ悲劇を二度と繰り返さないために若い世代の平和を愛する心を育むことの重要性が高まっている。

本事業は沖縄と同様に悲惨な戦争体験などを有し、体験の継承と平和構築に取り組んでいるアジア諸国と日本の学生が共に学び相互理解を深めることを目的としている。また、平和について考える機会を提供し、各地域の平和教育および平和活動に資するとともに、本事業で培った絆が平和構築のためのネットワークの形成や平和のために活動する人材の育成につながることを、そして事業成果が平和教育などに継続的に活用されることを目的としている。

この事業目的達成のため、以下の3つの目標を設定した。

各地域で発生した戦争や事件について学ぶことで、多様な視点から平和について考える機会を提供し、参加者間の相互理解の促進と各地域の平和教育・平和活動に資する。

参加者間の絆を育むことで、人的ネットワークの形成と平和に資する人材の育成に寄与する。

事業成果を平和教育等で活用できるようにする。

2 実施主体

主 管 沖縄県平和祈念資料館
受託事業者 特定非営利活動法人 沖縄平和協力センター

3 事業内容

『『平和への思い（ウムイ）』発信・交流・継承事業』は、令和元年度に開始され、今年度で7年目を迎える沖縄県の人材育成事業である。本事業は、沖縄と同様に悲惨な戦争体験などを有し、体験の継承と平和構築に取り組むアジア諸国の学生が学びつつ相互理解を深め、平和について考える機会を提供する。

令和元年度は、カンボジア、韓国、台湾、ベトナム、沖縄の5地域からの参加者が沖縄県内にて共同学習を行い、各地域が経験した悲惨な戦争や事件、継承についての意見を交わした。令和2年度には広島、長崎の2地域が新たに加わったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため沖縄県内への参集は叶わず、カンボジアは感染症の影響で事業への参加自体を取りやめた。それでも6地域をオンラインで結び「オンライン共同学習」を実施し、平和への思いを繋いだ。

令和3年度および4年度は、海外の参加者はオンラインでの参加、広島、長崎、沖縄の参加者は感染防止対策を十分に講じ、沖縄県内での対面参加というハイブリッド形式にて実施した。

令和5年度以降は、7地域からの参加者および指導者らが全員沖縄に参集し、県内各地の視察やディスカッションなどを通じた共同学習を実施した。

4 事業期間

事前学習／2025年11月15日（オンラインにて実施、詳細は14ページ）

共同学習／2025年11月24日～29日（沖縄県内にて実施、詳細は15ページ以降）

5 実施体制

事業責任者

沖縄県平和祈念資料館 主査 棚原和宏
 沖縄平和協力センター 事務局長 樋口洋平

沖縄平和協力センター

理事長 仲泊和枝
 事務局長 樋口洋平（事業統括）
 研究員 金城愛乃
 研究員 大城都子

沖縄県平和祈念資料館

学芸班長 中山晋
 主査 棚原和宏

（株）国際旅行社

企画事業部 主任 上地翔太

（株）okicom

映像音響技術責任者 武田 誠 映像撮影責任者 高良 史朗
 配信管理責任者 宮城 光司 カメラオペレーター 玉城 貴史
 音響技術担当 藤村 一豊 田口 直也
 配信管理担当 新垣 ステファニー美香

実施団体の人員配置

樋口洋平（沖縄平和協力センター 事務局長）

本事業の統括責任者として、共同学習の運営、帯同、事業全体のマネジメントを担当。

仲泊和枝（沖縄平和協力センター 理事長）

本事業の統括補佐として、共同学習の運営、帯同、事業全体のマネジメント補佐、予算管理を担当。

金城愛乃（沖縄平和協力センター 研究員）

本事業の運営スタッフとして、共同学習の運営、広報、翻訳、事業全体のマネジメント補佐を担当。

大城都子（沖縄平和協力センター 研究員）

本事業の運営スタッフとして、共同学習の運営、翻訳、撮影、事業全体のマネジメント補佐を担当。

6 参加地域における事業実施

参加者選考

〈参加者の選考および資格要件〉

参加者については各地域から5名を選考することとし、参加資格要件は以下の通りである。

- 原則として各募集国・地域に在住する大学生であること。
- 事業の主旨を理解し、将来自国での平和教育・平和活動に携わる意思のある者で、事業参加国の若者と連携して平和発信に寄与する意思のある者であること。
- 事前学習と沖縄での共同学習に原則全日程参加できること。

〈参加国・地域における学生の応募、選考、窓口機関への委託〉

沖縄以外の地域における窓口機関について、本事業の趣旨・目的を十分に理解しているという観点から主に昨年度に募集窓口を担った機関へ再依頼した。沖縄県内においては、実施団体が窓口業務を担い、県内の各大学への周知を行ったうえで参加者を公募した。また、各窓口機関には、参加学生がオンライン事前学習で発表する資料作成の指導と、沖縄県内での共同学習時に帯同・監督する指導者の配置も併せて依頼した。窓口機関一覧は以下の通りである。

地 域	募集・窓口期間	学習テーマ
沖 縄 県	実施団体（沖縄平和協力センター）	沖縄戦
広 島 県	まなび工房	広島県における原爆投下
長 崎 県	公益財団法人 長崎平和推進協会	長崎県における原爆投下
カンボジア	国立トゥール・スレン虐殺博物館 (大学と協力)	カンボジア大虐殺（ポル・ポト政権下の大虐殺）
韓 国	国立済州大学	済州島 4.3 事件
台 湾	国立政治大学	2.28 事件
ベトナム	ホーチミン市師範大学	ベトナム戦争

1 活動日程

日 付	時 間	内 容	備考 / 担当
11月15日 (土)	14:00～16:00	オンライン事前学習	沖縄平和協力センター（以下 OPAC）
11月23日 (日)	—	参加者沖縄入り	OPAC、国際旅行社
11月24日 (月/祝日)	09:00～10:35	オリエンテーション、プログラム開会式、参加者自己紹介	OPAC
	10:35～10:50	休憩	
	10:50～12:00	チームビルディング・ワークショップ 前半	上杉勇司（早稲田大学 教授）
	12:00～12:50	昼食	
	13:00～16:45	チームビルディング・ワークショップ 後半	上杉勇司
	17:00～18:00	振り返り	
11月25日 (火)	09:15～10:35	各地域の発表 前半	
	10:35～10:45	休憩	
	10:45～11:45	各地域の発表 後半	
	12:00～13:00	昼食	
	13:00～14:40	講義：モノが語る沖縄戦	大城航（沖縄歴史教育研究家、沖縄県平和祈念資料館職員）
	14:40～15:00	休憩	
	15:00～16:30	視察：資料館展示、平和の礎	
	16:30～16:50	振り返り	
11月26日 (水)	08:30～09:15	視察：嘉数高台公園	大城航 仲本和（沖縄チーム指導者、沖縄県平和祈念資料館職員）
	10:10～11:45	視察：首里城公園	那覇市街角ガイド
	11:45～12:00	視察：第 32 軍司令部壕跡	仲本和
	12:30～13:20	昼食	
	13:30～14:45	交流：OBOG オンライン交流会	
	14:45～15:00	休憩	
	15:00～16:30	講義：安全保障と沖縄	山本章子（琉球大学 准教授）
11月27日 (木)	09:00～11:30	自習時間	
	11:30～12:20	昼食	
	13:15～16:30	視察：南風原文化センター	南風原文化センタースタッフ
11月28日 (金)	10:00～11:50	ディスカッション	新垣誠（沖縄キリスト教学院大学 教授）
	12:30～13:30	昼食	
	14:00～16:00	交流：豊見城南高校での出前事業、交流会	
11月29日 (土)	12:00～13:00	リハーサル	
	13:30～17:00	シンポジウム	OPAC、okicom、新垣誠
	17:00～18:00	プログラム閉会式	
	19:00～20:30	懇談会	
11月30日 (日)	—	解散、参加者沖縄発	OPAC、国際旅行社

バス移動時間、待機時間等は除く

3 事前学習

(1) 7地域での戦争・紛争等に関する学習

沖縄での共同学習の前に、7地域では指導者のもとそれぞれの学習テーマに関する勉強会やフィールドワークが実施された。参加者は各地の歴史の関して改めて理解しつつ、プレゼンテーションやシンポジウムにむけた資料を作成した。



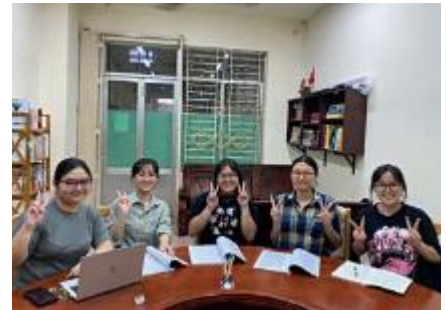
沖縄チーム
於：伊江島



長崎チーム
於：長崎原爆資料館



広島チーム
於：大塚公民館



ベトナムチーム
於：ホーチミン市師範大学



韓国チーム
於：済州大学



台湾チーム
於：228 記念館



カンボジアチーム
於：トゥール・スレン虐殺博物館

(2) オンライン研修

共同学習のブリーフィングと参加者同士の顔合わせを兼ねたオンライン研修が実施された。事務局からは沖縄滞在中のスケジュールや推奨される持ち物などに関する連絡事項が案内されたほか、参加者による地域紹介が行われた。



ブリーフィング資料

5 共同学習最終日 成果報告会

6日目 (11月29日)

沖縄での共同学習最終日にシンポジウムが実施され、参加者は事業を通じての学びを発表した。

〈シンポジウム あしたのアジア 2025〉

日時 令和7年11月29日(土) 14:00～16:30

会場 沖縄県市町村自治会館ホール

概要 【第1部】プレゼンテーション
アジア7地域における戦争および紛争、沖縄での学び
【第2部】パネルディスカッション

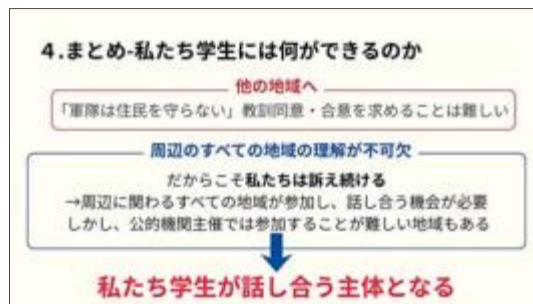


第1部 プレゼンテーション

沖縄チーム

沖縄戦
沖縄戦の縮図とも言われる伊江島に焦点を当てた。戦前から、日本軍の滑走路建設のため伊江島の住民の生活は軍事化されていた。地上戦が始まると、住民は米軍の攻撃や日本軍による強制的な動員などにより、多くの方が亡くなった。終戦後も米軍基地建設のために住民は島外への移動を強いられ、自らの土地を守るために非暴力による抵抗を続けた。現在も伊江島の約3割が米軍基地のままであり、戦争の残忍さだけでなく、戦後も住民が闘い続けてきた現実が残っている。伊江島に残る様々なものは、「沖縄戦はまだ終わっていない」という問いかけを今を生きる私たちに発信し続けていると感じた。

事業で学んだこと
住民と軍隊という二つの視点から沖縄戦を学習した結果、「軍隊は住民を守らない」という教訓を提示した。この教訓は、戦争が始まれば住民の犠牲を止められないという点で、他地域の歴史にも共通していることを知った。軍備拡張や基地と隣り合わせの状況にある沖縄だからこそ、この教訓を沖縄だけのものとせず、軍事的な脅威と向き合うアジアの仲間たちのために沖縄から発信し続ける意義があると確信した。相互理解を深めるためには、周辺の全ての地域が参加し、一方的な伝達ではなく、対話を重ねる機会を繰り返し作ることが大切だと学んだ。



広島チーム

広島県における原爆投下 ……………

1945年8月6日午前8時15分、T字型の相生橋が投下目標点とされた広島に原子爆弾「リトルボーイ」が投下された。投下前の広島市はそれまでに受けた被害が小さかったため、原爆の威力を十分に発揮できると考えられ、第一目標とされた。爆心地付近では熱線が6,000度、爆風が秒速300mに達し、人々は放射線による急性放射線症などに苦しんだ。1945年12月末までに約14万人が死亡し、これは当時の広島市人口約35万人の約半分にあたる。市中心部では木造家屋は全て破壊され、爆心地から半径2km以内の12km²が壊滅した。路面電車は原爆投下の3日後には運行を再開し、現在でも当時の路線を走っている。

事業で学んだこと ……………

沖縄での学習を通じ、一瞬で命が奪われた広島に原爆に対し、沖縄戦は長期間にわたり住民が戦場にさらされ続けたという両地域の特性の違いを認識した。本来攻撃されないはずの住民が兵士と同じ戦地に追い込まれた事実への衝撃を受け、人々が逃げる選択肢さえ奪われていた状況が印象に残った。また、共同学習で合意形成がうまくいった場面とそうでない場面を比較すると、対話の姿勢が重要だと学んだ。うまくいった場面では、相手の意見を素直に受け取り、否定から入らずに寄り添う姿勢があった。同じような体験をした者同士で対話を行うことで、異なる意見も視点の違いとして尊重し合えるという気づきを得た。



長崎チーム

長崎県における原爆投下 ……………

1945年8月9日午前11時2分、長崎市の上空500mで原子爆弾が炸裂した。当時の人口約24万人のうち、1945年12月末までに約7万4千人が死亡し、約7万5千人が負傷した。被爆したのは日本人だけでなく、朝鮮人や中国人、オランダ人やイギリス人など多くの外国人も含まれていた。原爆のエネルギーは爆風、熱線、放射線の3つに分けられ、放射線の影響により外傷がなくても亡くなる方が大勢いた。原爆の苦しみは、その後生き残った人々の人生にも残り続けている。

事業で学んだこと ……………

普天間基地周辺の視察を通じ、基地周辺の住民が戦闘機の騒音や事故と隣り合わせの生活を「当たり前」と受け止め、消極的なイメージを潜在的に刷り込まれている可能性に気づいた。この経験から、教育が重要であるのは前提として、どのような教育を提供するかが重要だと学んだ。具体的には、自国の被害だけでなく加害の側面を含めた多面的・多角的な教育、他地域の歴史についての教育、平和への自発性を促す教育、そして人権教育の4つの要素を持つ教育の必要性が重要であると考えた。これらの教育を通じ、無知をなくすことで対立の原因を取り除くことができると考える。



教育が大事なのはもちろん、
“どのような教育”を提供するかが重要なのでは？

- ＜重視すべき教育の観点＞
- ①多面的な教育
 - ②他地域についての教育
 - ③自発性をもたらす教育
 - ④人権教育

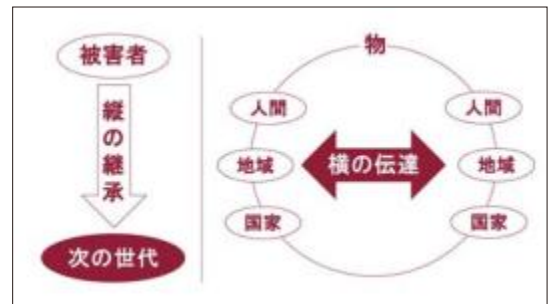
韓国チーム

済州島 4.3 事件

済州島 4.3 事件は、1947 年から約 4 年間にわたり発生した武力衝突と、その過程で国家暴力によって多数の住民が犠牲となった事件である。多くの人々が訪れる美しい観光地である済州島で、かつてこのような残酷な出来事が起きた。今回のプログラムに参加した 7 地域は、済州島と同様に国家暴力を経験したという共通点を持っている。

事業で学んだこと

今回の沖縄でのプログラムは、爆弾の破片を触ったり、壕の狭さを体験したりするなど、「モノが語る沖縄戦」という観点での体験型学習が心に深く響いた。戦争体験者が減少する中で、今後はこの「モノによる継承」（横の伝達）が主流になると考えた。これに加え、若者同士がプログラム外での交流を通じて「本音トーク」を行い、基地移転問題など複雑な問題に対する多様な立場や意見を知ることの重要性を実感した。例えば、沖縄本島の基地負担軽減のために石垣島への自衛隊基地移転を望むという複雑な立場の話などを聞き、改めて多様な意見を知る機会となった。



台湾チーム

2.28 事件

2.28 事件は台湾の人々に大きな恐怖をもたらした出来事である。同じ民族の政権が復帰することで復興が期待されたにもかかわらず、実際にもたらされたのは集権的な統制による恐怖であった。この悲劇的な出来事の後も、台湾の人々は深い傷を抱えながら、自由、民主、そして平和の実現のために歩み続けてきた。2.28 事件は出身背景の違いによる対立や不信から生じ、その対立は形を変えながら現在も台湾社会に続いている。

事業で学んだこと

沖縄と台湾では、米軍基地に対する意識が大きく異なることを学んだ。沖縄が基地を戦争と支配の象徴と捉え、騒音や事故といったマイナスの影響に直面し、基地を安全の提供者ではなく脅威と認識しているのに対し、台湾は地政学的な視点から基地を地域の安定と安全保障の強力な提供者と見なしている。戦争遺跡の見学や他地域の学生との対話を通じ、戦争が教科書の中の出来事ではなく、実際に人が傷つき苦しんでいたという歴史のリアルさを実感した。この実感が、悲劇を繰り返さないための平和を求める重要な第一歩であると確信した。また、平和とは歴史を知り、記憶を受け継ぐことで守られる価値であると再認識した。



実感：歴史の中の「人」を見ることが、平和と理解への第一歩

1. 接触と交流を通して感じた歴史のリアル
戦争遺跡や戦争写真の鑑賞
戦争経験を持つ国・地域の学生との対話
— 文字では伝わらない「痛み」と「存在」を感じた
2. 実感は平和を求める原動力
残酷さを理解することで、
譲り歩かないように努力をする
— 平和はスローガンではなく、記憶と共感の積み重ねから
3. 台湾の二二八移行期正義とのつながり
自身背景の違いによる対立は空も感じている
お互いの痛みを「実感」できれば、対立は減り、理解は増えるはず
— 一人の痛みを見ること、感じるものが、平和への第一歩

ベトナムチーム

ベトナム戦争 ……
ベトナム戦争は、社会主義の拡大を防ぐという目的でアメリカが介入したことを背景とする戦争である。この戦争の主な特徴は、国を守るためにベトナムの全国民が命をかけて戦った「全国民抗戦」と、農民が夜は兵士として戦った「ゲリラ戦」である。ベトナムでは兵士と民間人を含め 200 万人以上が犠牲となり、アメリカ側も約 5 万 8 千人の兵士が亡くなった。約 785 万トンの爆弾が投下され、特に深刻な影響を残した枯葉剤により、ベトナムには現在でも生まれつきの病気や障害に苦しむ人々がいる。

事業で学んだこと ……
普天間基地を視察し、戦闘機の騒音を聞いた際、沖縄の住民が抱く不安を深く理解し、基地がなくなってこそ人々は本当に安心できると感じた。また、多様な背景を持つメンバーとの共同作業を通じて、協力と尊重があれば、言葉が違っていても心一つにして目標を達成できると学んだ。沖縄県平和祈念資料館で、慰霊碑に日本兵だけでなく民間人や敵であるアメリカ兵士の名前まで刻まれているのを見て驚き、戦争で命を奪われた人々はみんな同じ人間だと気づいた。平和は、相手を理解し思い合う小さな行動の積み重ねにより実現すると感じ、平和への思いは身近なところにあると再認識した。



「平和への思い」発信・交流・継承事業から学んだこと

1. 一つの旅が、視点を変え、沖縄の平和を考える声になる。
2. 協力と尊重が、思いを形にする。
3. 平和は、一人ひとりの命を大切にすることから始まる。
4. 心と心の交流が、未来を変える。

カンボジアチーム

カンボジア大虐殺 ……
ポル・ポト率いるクメール・ルージュ政権は 1975 年から 1979 年にカンボジアを支配した。彼らは階級、私有財産、学校、宗教などを完全に廃止した。さらに、農業に重点を置いた新たな社会の構築を目指し、1975 年 4 月 17 日にプノンペンを制圧した後、全ての人々を強制的に都市から追放した。この体制下では強制労働、飢餓、強制結婚、そして子どもの権利への深刻な虐待が横行し、推定 170 万から 200 万人のカンボジア人が命を落とした。

事業で学んだこと ……
各国の戦争や悲劇は異なるものの、それぞれの国が正義と平和のために共通の闘いを反映していることを理解した。沖縄では戦後も米軍基地の存在など、政府が継続的に対処しなければならない複雑な問題が残っていることを知った。また、平和教育と戦争の記憶に対する沖縄の人々の強い決意や、沖縄県平和祈念資料館にある犠牲者の名前が刻まれた記念碑の意義に感銘を受けた。紛争を生み出すのも人間であるが、紛争を終わらせることもできるのは人間であるという信念を再確認し、この経験をカンボジアのコミュニティと次世代の学校教育へ平和の教訓として持ち帰る責任があると学んだ。



What we have learned

- Deeper understanding of the histories and contexts of the different regions
 - Every tragedy is different, yet each reflects a shared struggle for justice and peace
- Outcomes**
- Legacy of conflict can persist long after war (Presence of the US military base)
 - Children's commitment to remembrance and peace education
 - Okinawa Peace Memorial Museum, memorial parks
 - Interacted with victims' families
 - Residents actively preserved historical sites highlighting the human cost of war
 - Human actions can become desperately crucial: the use of civilians as expendable



第2部 パネルディスカッション

第2部では、前日のディスカッションを踏まえて、それぞれの地域が抱える「負の歴史」や「痛み」をどう継承していくべきかについて議論を行った。本セッションの柱として、前日に各チームへ課された宿題「みんなと共有したい私たちの痛み」の回答を軸に対話が深められた。

モデレーター
新垣誠（沖縄キリスト教学院大学 教授）



Q. みんなと共有したい私たちの痛みは
なんですか？

長崎チーム
奪われる痛み



核兵器により、人だけでなく植物（山王神社の楠の木など）を含めたあらゆる命が奪われた事実に対する痛み。

広島チーム
理解することの出来ない痛み



どれほど学んでも当事者の痛みを理解することができず、記憶の風化に逆らえない、という当事者ではないからこそ感じる痛み。

沖縄チーム
共有することができない



沖縄の米軍基地から戦闘機が飛び立ち、ベトナム戦争に関与した歴史から、被害者と痛みを共有する資格があるのだろうかと考え、答えを出せなかった。

台湾チーム
人権（抑圧される痛み）



過去に政府により、一般市民の人権が奪われ軽視された痛みの歴史を踏まえた、普遍的な権利への希求。

韓国チーム
 $1 \times 1 \times 1 \times 1 \times 1 \times 1 \times 1 = 1$



互いの痛みを共有し、共感することで、悲しみは小さくなり、癒しにつながるのではないかと考えた。

カンボジアチーム
剥奪された自由と命の痛み



ポル・ポト政権下で、家族や人権や教育、命、日常のすべてが奪われた壮絶な歴史の痛み。

ベトナムチーム
子ども達の痛みと共感の気持ち



枯葉剤の被害を受けたり家族と引き離されたりしたベトナムの子どもたちの痛み。隣国カンボジアの悲劇に対しても、痛みを想像し共感する気持ち。



Q 歴史の継承で、難しいことや課題となることは何でしょうか？

- A. 住んでいる地域によって、戦争の体験や記憶、歴史に対する捉え方が違うことだと思います。求めているゴール（平和）が一緒だったとしても、そのプロセスが違うことに難しさを感じました。

Q $1 \times 1 \times 1 \dots$ の「1」は全部同じだと思いますか？

- A. 全部同じではなく、自分たちにとって大切なものも痛みもそれぞれ違うと思います。しかし、幸せになる権利を失った点においては同じだと言えます。

Q なぜ被害者は多くを語らないのでしょうか？

- A. 僕のおばあは戦争をしてはいけないということはよく言っていました。しかし、自身の体験について語らなかったのは、それだけ痛みを感じていたんじゃないかなと思います。

Q なぜ被害者に目線を合わせようと思ったのですか？

- A. ハンセン病の人々は差別を受けていて、施設の外にも自由に出ることができず、目の前の海の美しさを感じられなかったというのを聞いてとてもつらくなりました。それを知らずにいることが嫌だったため、物と人を合わせて考えることで、少しでも何か見えてくるのではないかと思います。

Q 物を使って被害の痛みを伝える理由はなんですか？

- A. 当事者でなければ共感しにくいことに対して、もっと容易に接することができるからだと思います。例えば、キーホルダーなどをつくって済州4.3を知らない人が興味を持つようになるきっかけになったらと考えています。

Q なぜ一部の被害者はつらい経験を表現するのだと思いますか？

- A. 痛みを伝えていく気持ちがあるからだと思います。カンボジアのキリング・フィールドを描いた画家は、自分が目撃したことを世界に知らせたいという思いで絵を描くようになりました。

Q なぜ当時の物を大切に残し、伝えていこうとするのでしょうか？

- A. 歴史を後世に伝えてくれるからだと思います。長崎においては、奪われたものは人の命だけではなく、植物も同じであり、そのことを伝えてくれるのが山王神社の楠だと思っています。被爆樹木について知らない人が多くいるため、歌手の福山雅治さんは、これを歌にすることで、より多くの人に認識してもらえればという思いで作ったのではないかと思います。

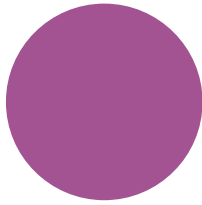
モデレーターからのメッセージ

他者の痛みを完全に理解することはできなくても、それを感じ取る仕草を諦めないことによって思いは繋がっていくのではないかと思います。理解不可能性や政治やイデオロギー、立場、加害や被害を越えたところにある思い（ウムイ）が共有されることによって見えてくる希望、それがこれからの世の中を変えていくのではないのでしょうか。

1

参加者による評価

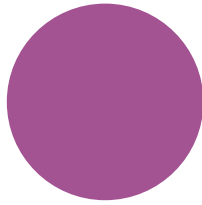
プログラム全体の満足度



100%

「とても満足」「満足」と回答した参加者

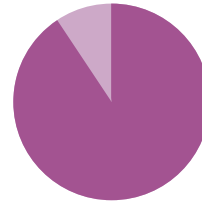
海外・県外学生との交流に関する満足度



100%

「とても満足」「満足」と回答した参加者

スケジュール・運営に関する満足度



90%

「とても満足」「満足」と回答した参加者

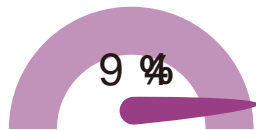
沖縄戦や他国の歴史に関する総合的な理解度



100%

「とてもよく理解できた」「よく理解できた」と回答した参加者

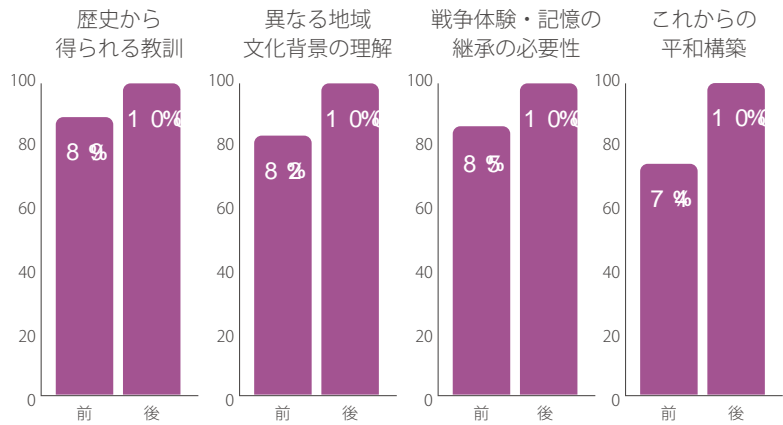
自分の地域の歴史に関する新たな気づき



90%

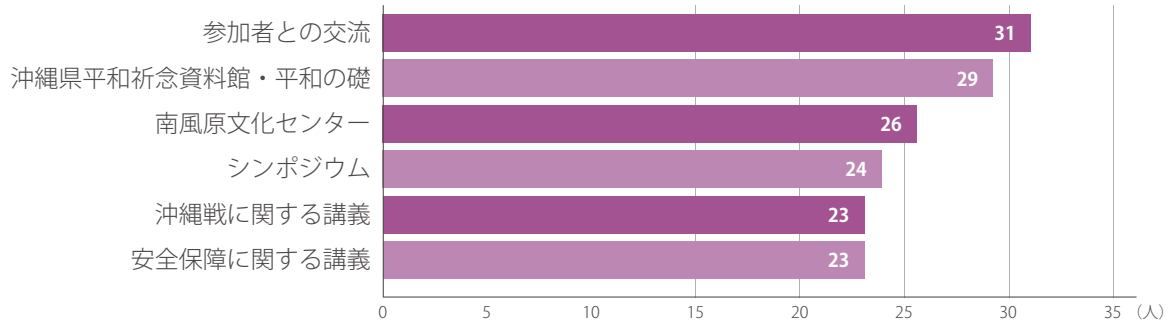
「とても高まった」「高まった」と回答した参加者

プログラム実施前後の興味・関心度の変化



「とても関心がある」「関心がある」と回答した参加者

特に満足度の高かったと感じるプログラム 内容別投票数（複数回答可）



その他

- ・各地域の歴史に関する発表 (22)
- ・チームビルディングワークショップ (20)
- ・嘉数高台公園 (18)
- ・ディスカッション (11)
- ・高校での出前事業・交流 (22)
- ・第32軍司令部壕 (18)
- ・首里城公園 (15)
- ・OB・OGとのオンライン交流 (10)

本プログラムを終えての感想

沖縄で沖縄戦について知ることができたこと、それを沖縄に住む学生から学べたことがとても大きな学びです。行かないと分からないを実感した7日間でした。地上戦の悲惨さも基地問題の現状も沖縄県民の思いも現地に行ったから初めて知ることができました。そして、他チームとの交流がシンプルに楽しかったです。友達になったからこそそれをひとつではなく自分ごととできる。これからは6地域のニュースに耳と心を傾けられると思いました。(広島)

この研修を通して私が最も強く感じているのは、互いの違いを認め合いながら、共通点を見つけて心から笑い合うことができたということです。1週間という長いようで短い時間を共に過ごす中で、「違うからこそ面白い」という感覚を味わい、平和とは「他者と向き合う姿勢」から始まるのだと実感しました。この経験は私にとって一生の宝物であり、今言えることは、「人生で一番楽しい1週間だった」ということです。(長崎)

こんなに考えて、悩んで、泣いて、笑って、喜んだ1週間はこれまでありませんでした。言語も置かれてる立場も環境も違うのに、お互いを理解しようと、想いを共有しようと無我夢中でいれた時間が幸せでした。自分の考えていること、想っていることが伝わらず、つらかったこともありましたが、どうやったら理解してくれるかな、逆に自分も理解していない部分があるんじゃないかと自分を見つめなおす機会にもなりました。「平和な未来を創る」という想いで繋がれたことは私にとって一生の宝物だし、その仲間たちと離れていても繋がっていると思えていること自体、平和な未来を創るための大きな一歩なんじゃないかなと考えています。(沖縄)

本当に今まで生きてきた中で一番充実した1週間でした。何日もかけて築かれた関係だからこそできる「踏み込んだ」質問をすることができて、大変学びになりました。ただ学びに没頭できるこの期間を通して自分自身がこんなにも平和について学び・考えることが好きなことに気づくことができました。そして、今までの生活が退屈でしよるがなくなりました。たくさんの友達もできました。しかも、本気で色々向き合えたからこそ、彼らとは一生の友達であれると思います。(沖縄)

さまざまな場所や史跡を訪れたフィールドトリップは、戦争のイメージそのものに対する新しい視点を与えてくれました。紛争は悪いものですが、実際に経験したことのない私にとって、その場に立つことは身震いするような体験でありつつも、互いの文化を知り、理解する学びは非常に興味深いものでした。これは私が関わっている分野でもあり、今後さらに探求していきたいと感じました。(カンボジア)

平和について真剣に考えることができる機会になったことが一番良かったです。他の国の人々の話も聞きながら、現在の痛みを乗り越えてどのように前へ進むべきかを皆で一緒に考えることができて良かったです。そのことについて多くを学ぶことができ、さまざまな経験を通して「これからどのように生きていくべきか」を学べたように思い、大きな助けになりました。(韓国)

今回のプログラムを通して、自分自身の国の歴史、そしてこれまで関心を持たなかった他国の歴史を、より深く知ることができました。特に、沖縄の抱える痛みについて、より認識を深めることができました。また、沖縄と台湾の間で、米軍基地に対する認識や姿勢が異なることも痛感しました。(台湾)

このプログラムで沖縄戦をはじめ、各国・地域が抱える悲しい歴史について学びました。歴史や国際関係は「国」と「国」の視点で語る場合が多いですが、そこに生きる「人」の存在や「声」も、決して無視してはいけない大切なものだと強く感じました。(台湾)

このプログラムを通して、自分が思っていた以上にたくさんのことを学びました。中でも一番大きな学びは、「相手の立場や経験から物事を考える」ということです。同じ戦闘機を見ても、国や置かれている状況が違えば、こんなにも感じ方が違うんだと気づきました。そして、「本当に体験してみないと、相手の気持ちは分からないことも多いんだ」とも強く感じました。もし話を聞くだけだったら、ここまで深く感じることはできなかったと思います。このプログラムの一番いいところは、ただ話を聞くだけでなく、実際に体験し、自分で考える機会があったことだと思います。私はそこが一番好きです。(ベトナム)

本プログラムを通じて生まれた関心と今後の展望

今回仲良くなったみんなと、このプログラム限りの縁にはしたくないです。広島チームの一部メンバーは今月長崎に研修に行き長崎チームと交流する予定です。私は所属する平和団体の研修で長崎や沖縄を訪れ、学びを継続し学びの輪を広げたいと考えています。(広島)

6地域すべてに行き、その国で起こったことが展示されている資料館に足を運びたいと思います。今回の研修がきっかけでずっと訪れてみたかったカンボジアに行くツアーに応募しました。そして、沖縄で出会った各国の友達にもまた会いたいです。(広島)

平和教育に力を入れていきたいと思います。長崎グループでは様々なアクションプランが出ていたので、案にあるものはすべて実行したいと思っています。(長崎)

今回の研修を通して、私は他の地域の歴史を悲惨な出来事に限らず、より幅広く学びたいと感じました。相手の国の成り立ちや文化、使用している言語を理解することで、その人自身をより深く理解できると気づいたからです。(長崎)

各地域の現在の防衛体制や歴史の継承方法を政治とも関連させて調べてみたいなと思いました。それが各地域にどのように作用しているのかも気になります。(沖縄)

今後は、いろんな国の平和観を知るために繋がりを作るようにしていきたいです。歴史を学ぶことは今を学ぶことにつながると思うのでそこも続けていきたいです。(沖縄)

私は特に、沖縄県平和祈念資料館に強い関心を抱きました。資料館には戦争に関する多くの物語が展示されており、その中でも私の目を最も引いたのは、犠牲者や命を落とした人々の名前が刻まれた大理石の壁(平和の礎)でした。これは、戦争の後に起こること、つまり犠牲者の家族に対して提供される心の癒やしや和解を象徴しているように感じました。(カンボジア)

このプログラムを終えて、私は各国の戦争の歴史についてもっと学びたいと思うようになり、さらに調べてみたいと考えています。また、平和に関する活動にボランティアとして参加したいという気持ちも強くなりました。そして、広島や長崎の資料館を訪れてみたいと思っています。(カンボジア)

すべての地域に行ってみたいです。どの地域でも大切な友人たちに出会い、その友人たちが歩んできた人生や地域、歴史についてさらに知りたいという思いが強くなりました。そして、沖縄にももう一度行きたいです。平和教育の面でとても優れていると感じたので、もう一度訪れてもっと学びたいと思っています。(韓国)

私がかつて中・高校生の時、なんで歴史と平和に関心を持たなかったんだろうと考えました。それは、教育に足りないものがあつたのではないかと、自分が教える立場になって子供や学生達に歴史や平和について教えてあげたいと思いました。それで、平和について自分の意見を持ち一緒に語れる人が増えたらいいと思います。(韓国)

今回の活動を通じて、台湾に帰国した後も沖縄の歴史に関連する多くの書籍や研究を読みました。今後は、石垣島や宮古島にも実際に訪れてみたいと考えています。これらは全て沖縄県に属していますが、それぞれに異なる歴史的な問題や解決すべき課題があり、私たちもそれらを理解する必要があると感じています。(台湾)

世界情勢をより深く理解したいと思っています。私は議論するのが特に好きではありませんが、私たち自身の状況を理解し、潜在的な危機に備えるためには、政治と国際関係を理解する必要があります。(台湾)

戦争体験を語り継ぐ活動や、平和教育に関わる仕事にも関心が高まりました。今後は、自分が学んだことを周りの人にも伝え、平和について考えるきっかけを作れるような活動をしてみたいです。(ベトナム)

このプログラムを通して、戦争と平和についてもっと深く学びたいと思うようになりました。特に、広島と長崎にも実際に行き、自分の目で歴史を確かめたいという気持ちが強くなりました。(ベトナム)

本プログラムを通じて感じた、平和に関するあなたの考え

平和は何か1つすればすぐ解決できることではなく、また別の課題が生じたり、解決してもかつての問題の影響は残り続けます。平和は単純な関係式で表せないから、こうして私たちは沖縄に集まり、ずっと平和を考え続けているのだと思います。(広島)

私はこのプログラムを通して、戦争や歴史のことはマストで知っておかなきゃいけない事柄の1つだと感じました。私達学生は微力だとしても力はあります。様々なアイデアを深めてアクションを起こしていき、包括的な意味での平和な世界をつくっていきたいです。(長崎)

平和とは、いまの私たちだと感じました。国と国で考えると、仲が悪いように感じてしまったとしても、私たち学生はそのようなこと気にもならないくらい仲が良いです。仲が良い上で、政治の話ができます。このような繋がりがたくさん生まれれば、全体的に平和に近づくのではないかとプログラムを通じて感じました。(長崎)

皆平和を願っているが、辿ってきた歴史、現在置かれる状況は異なるから、平和観ももちろん違う。だから尊重し合うことが必要。今までの私はそこで思考停止してしまっていました。しかし今回台湾やベトナムの学生と深く話し、全力で沖縄を理解しようとしてくれる姿勢に感動しました。例え平和観が異なれど、お互いを思いあいながら同じ方向を向いて頑張れる可能性を強く感じています。(沖縄)

米軍基地としても、平和のためにいらないと感じる人もいれば、少し地域が違えば価値のあるものと捉えている人もいます。何か平和を考えるためには、狭い知見だけで判断するのではなく、歴史を学び、そこから何を学べるかを理解して、考えていかなければいけないと感じています。(沖縄)

私にとって、このプログラムを通して得た平和の理解とは、対話、理解、教育、そして困難な歴史と向き合う勇気に根ざした、途切れることのない継続的な努力だと言えます。(カンボジア)

このプログラムは、若者が平和の促進に重要な役割を果たすという私の信念をさらに強くしました。また、物語を共有すること、互いから学ぶこと、信頼を築くことといった小さな行動でも、長期的な和解や調和に貢献できるのだと感じました。(カンボジア)

平和とは皆が少しずつ不便さを受け入れることだと考えています。シンポジウムするとき、韓国チームが示した $1 \times 1 \times 1 \dots = 1$ の最後の「1」は、私には誰のものなのか理解できませんでした。しかし、その最後の「1」だけは、誰もが我慢できる、「そのくらいなら理解して受け流せるよ」という意味の1だと感じました。(韓国)

シンポジウムでの沖縄チームのレオ君の感想の際に印象に残った言葉がありました。「一番大切なものはここに居るみんなの笑顔です。」この言葉を聞いたとき、いま一番平和を感じているんだと思いました。平和の定義は人や国によって異なると思います。でも、平和を感じることはみんなあまり変わらないと思います。(韓国)

私は、平和はお互いの痛みを認識し、戦争の悲惨な結果を理解するという土台の上に築かれるものだと考えています。そしてそれは、相互理解、対話、コミュニケーションを通じて達成できるものです。しかし、現在の国際情勢を鑑みると、対話が必ずしも良い結果を生むとは限りません。なぜなら、立場は常に相反しており、利害を統合することができないからです。私たちのような小さな個体としては、平和の構築の困難さや無力感をしばしば痛感します。国際情勢こそが、真に平和へと向かうことができるかどうかの大きな鍵だと感じています。平和が共通認識となったとき初めて、皆が対話が最大の価値を生み出すと信じられるようになるでしょう。人類は平和への追求を諦めるべきではないと、私は考えます。(台湾)

以前の私は、平和を守るということは大きなことをしなければならないと思っていました。しかし、このプログラムを通して、平和は日常の小さな行動から生まれるものだと学びました。「ありがとう」と伝えること、人の話をしっかり聞くこと、違いを理解しようとして会話すること、そうした小さなことこそが、平和を支える大切な土台になると感じました。(ベトナム)

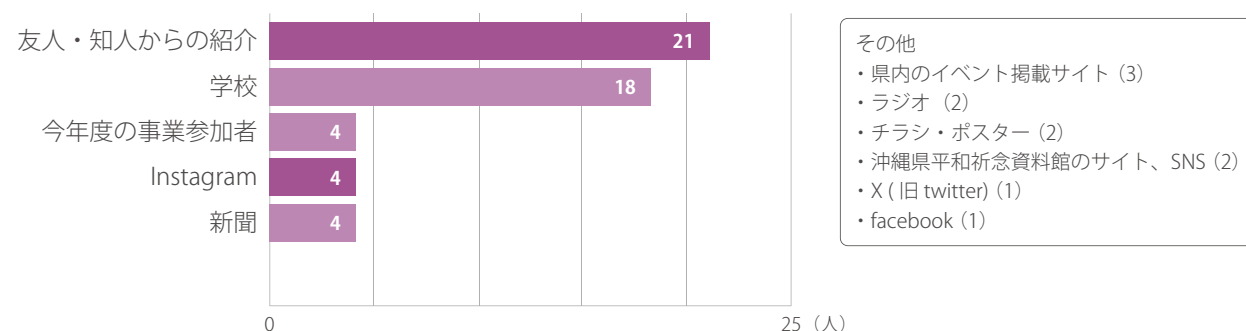
2 シンポジウム来場者によるアンケート

年齢別構成

来場者：60名（アンケート回収数 54）

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	解答なし
17	2	8	12	7	1	5	2

シンポジウムを知ったきっかけ（複数回答可）



感想（一部抜粋）

- ・学校の授業で戦争について学んだ時は「どれほど辛かったか」までで、それを踏まえて「私達はどうか」という考えまで至る機会の中々なかったので、今回の事業を通し、私のような高校生も「どうすれば少しでも戦争について共有し、なくすことができるかな？」と考えることができました。
- ・各地域の悲惨な出来事について、普段は分からない所まで知ることができて、平和や戦争、今の世界の状況についてもっと理解しなければならないと考えさせられました。
- ・平和学習の本質が分かった。また、戦争について知ろうという態度が一番大切だと分かった。話し合っ、認め合う（道徳みたいな）ディスカッション。
- ・韓国チームの発表が印象に残っている。（国や所属や歳や名前などの）皮をかぶっている私たち同士がもっと話すためには、関係がきつと大切。とても共感した。
- ・どの地域もこれからの平和な未来を作るための様々なアクションを考えていることが印象的。過去の出来事、現在の課題は各地域によって様々だが、対話や相互理解の重要性を改めて学べた。
- ・各国、各地域の方々が、自国での戦争被害に加え、沖縄での学びについて、日本語でレポートされていたことが印象的で、若い世代の智慧やバイタリティーを感じました。
- ・パネルディスカッションで出た、沖縄地域の宿題の答えで、「ベトナム戦争では、沖縄は加害者になるのでは？」という自問は、自分がこれまで学習した平和学習にはなかった視点でした。改めて平和とは何かを振り返りたいと思います。
- ・各地の若者が自分にできることを考えてくれた事が、半ば諦めていた自分にとって希望に思えた。逆に、恥ずかしくもあり、見直そうと思う。
- ・とても良いイベントでした。世界の若者たちの今後の活躍にとっても期待が持てました。こういった交流はこれからもどんどん続けていってほしいです。
- ・やはり若い人が興味関心を持ってくれることが嬉しい。やる気を育てることが第一です。学生の素直な感想こそが平和をつくります。
- ・こういう機会をつくる事が行政の平和を維持する作業だと思います。世界情勢がゆれ、暴力的気配の下にあっても種をまき続ける！